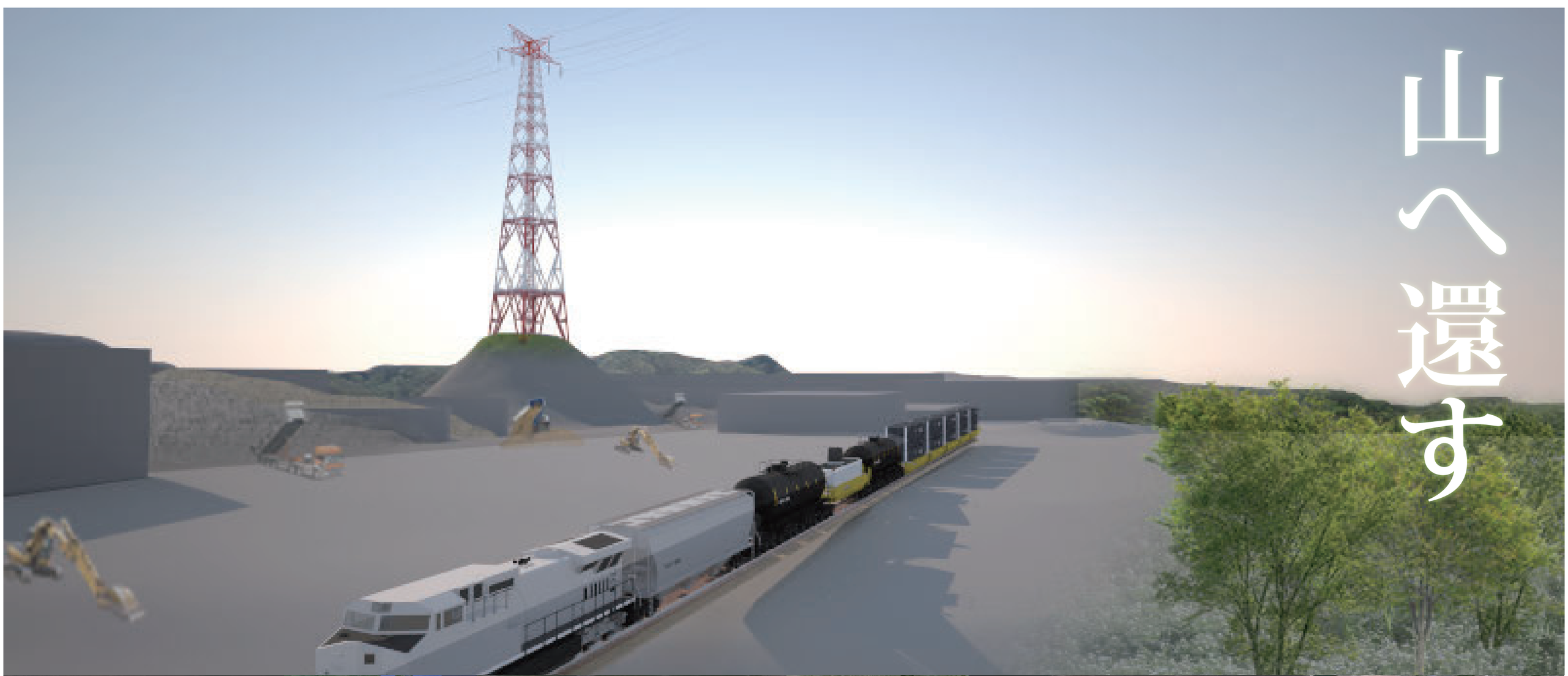
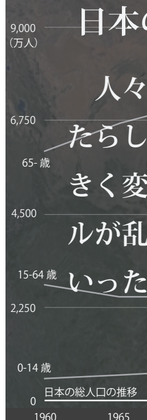
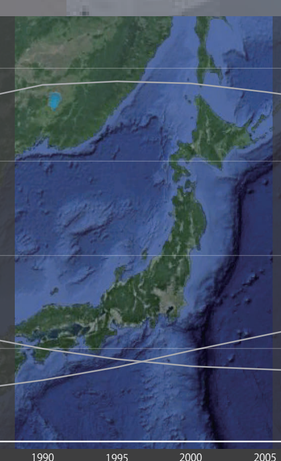
山へ還す



日本の高度経済成長期

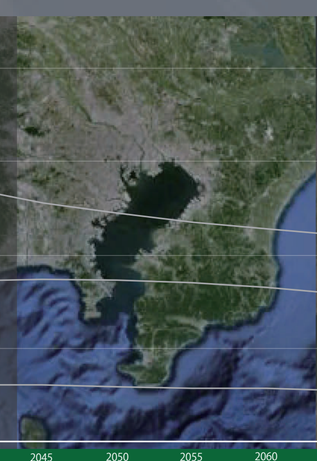
人々の生活に多くの変化をもたらした時代。日本の都市も大きく変容してゆき、超高層のビルが乱立。急激な発展を遂げていった。





首都・東京と房総半島

日本は人口縮小を迎え、空き家・空きビルが増加の一途を辿る。今後、東京は急激な縮小を迎えていく。都市に直結した良質な山砂採取場である房総半島は、これまで7000億tの山砂を都市へ供給していた。

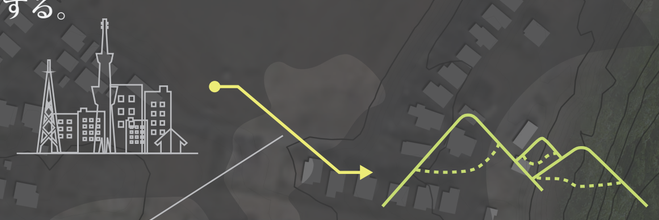


千葉県君津市の山砂採取場

都市が縮小していく将来、産業が廃れ、削りとられた山々はその姿のまま取り残されていくことが予見されている。君津市周辺は周りをまちに囲まれている採取場が多くあり、この地をどう活かしていくかが課題となっている。

CONCEPT：循環型社会から還元型社会へ

縮小する社会に対し、資源は飽和状態となる。循環型社会もついに終焉を迎え、世の中は資源を自然へと還す動きを見せる。私たちは君津市の山砂採取場を都市解体処理設備のインフラとして整備することを提案する。



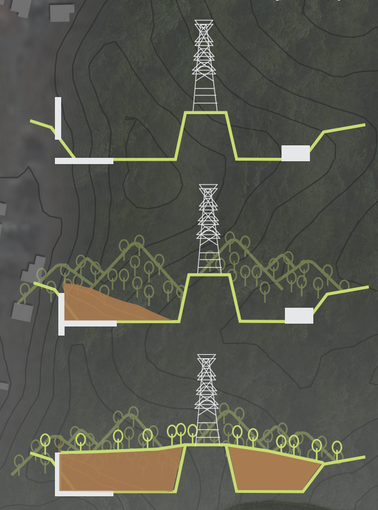
SISTEM：都市解体インフラ

車社会が終わる。アクアライン及びダンプ街道が再編され、新しく RLT が整備される。動線となり、東京から君津まで解体物を運搬する。

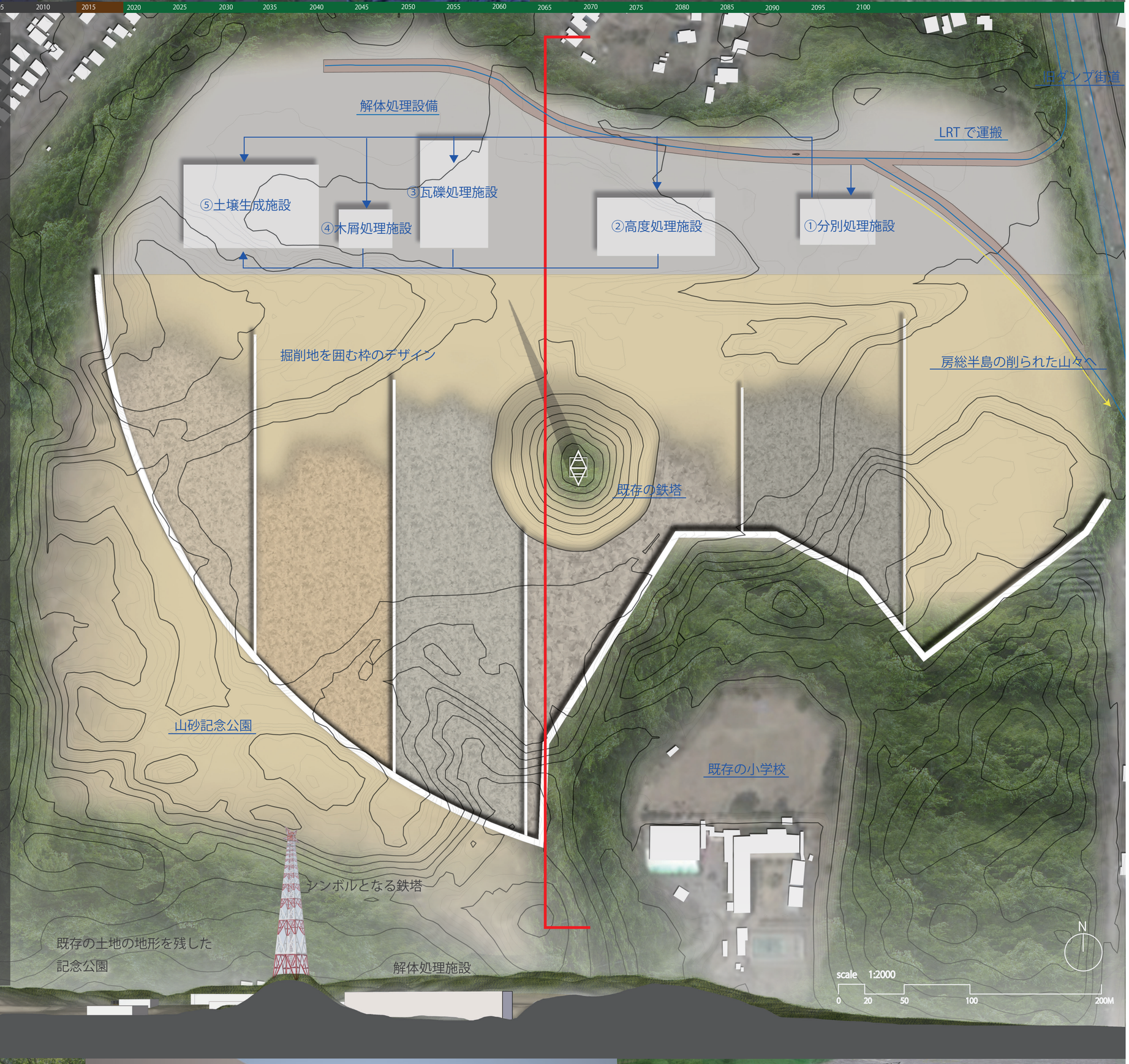
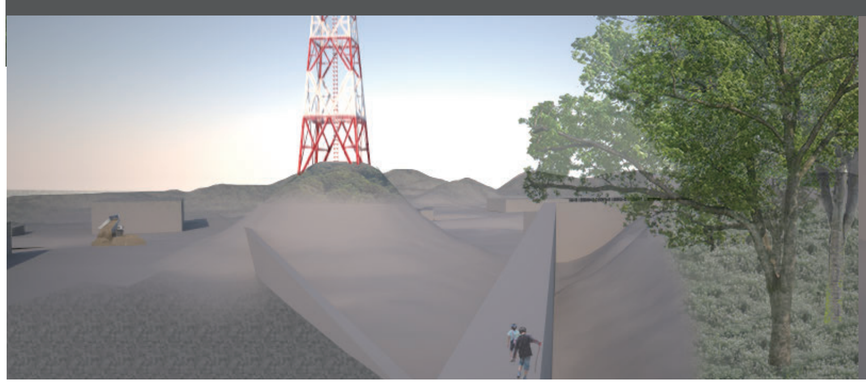
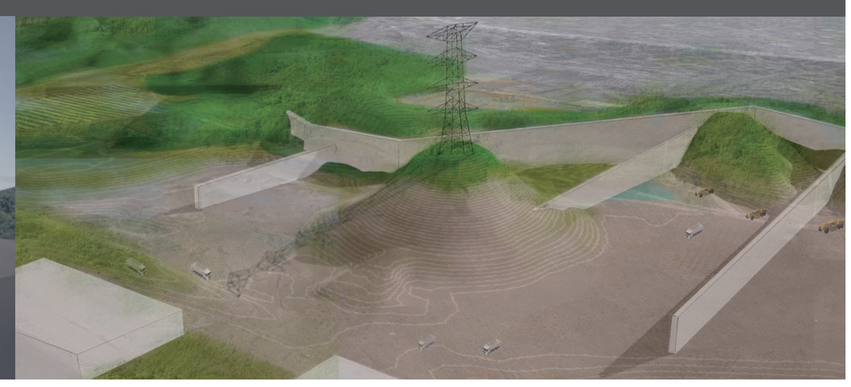
解体処理場へ着くと素材を分解・分別し、各々の還元処置施設へ送られる適切な処置が行われ、その後土壌となる。

作られた土壌は君津の土地に還され、やがて緑地を含む山へとなっていく。

TIME LINE：100 年の景



還元型社会への突入に向けて、既存地に塀と解体処理施設を整備する。

50 年後、都市の解体が進むたびに、房総半島の山へ復元されていく。

100 年後、房総半島の山々が復元される。機能を失った解体処理場は、自らを山と変え、自然公園となる。